

お 蝶

水 野 仙 子

お蝶がよく世話をしてくれる。今度千代さんが来る時に、半襟でも買つて来て下さい。明日は受持の代る日で圖を引かなければならないといつて私と別れるのを悲しんで居た。

或日私はこんなことの書き添へてある夫の手紙を受取りました。藪から棒にこんなことを言はれまして、私は一寸まごつきましたが、直ぐにそれは宿の女中であることを悟りました。ふと私の胸には、二十ばかりの丸々とした、憎氣のない絶えず笑顔でばかりものを云ふ、女中なぞするやうな女ぢやないのだけれど譯があつてといふやうな、そんな女の顔がちらと泛んで消えました。空想といふものは一瞬時のうちに、微細なそして意表に出た働きをするものです。でも私は別段深くも氣に

とめず、其手紙を巻き終りましたが、それでも返事には忘れずにお蝶の年齢を聞いてやりました。半襟の柄の見立てやらがあゝと思ひましたので。すると折り返しての手紙の中に

お蝶は色の黒い醜い顔の女さ、年は二十四とか言ふことだが千代さんよりはすつと老けて見える。といふやうなことが書いてありました。私は想像が外れた飽氣なさを一寸馬鹿々々しく思ひました。又それで安心したやうな心の傍から、お蝶は色の黒い醜い顔の女さとも私にだから餘計な心配はするなと言つてあるやうな文句を見まして、もしや知らず／＼手紙の中の筆先に、はしたない閃きを見せたのぢやなかつたかしらと、極りの悪いやうな氣もいたしました、それから不思議にもお蝶といふ名がなんとなき氣にかゝるものとなりました。

越えて七日ばかり、祖母の病氣もどうやら大丈夫らしくなりましたので、私もいよく那須を出ることになりました、もと／＼この夏は二人で約束しく海邊の生活をする積りでありましたのを、その間際になつて私は突然私をこの上もなく可愛いがつてくれる祖母の病氣の電報を受取つて、慌てゝ那須に歸らなければならなかつたのでございます。その時私どもは結婚後まだ一週間ばかりのものでございました。少しく體を毀して居りました夫は一足先に海にまゐることゝなり、私は上野から、夫は兩國から上總へと、別れ／＼に立つたのでございました。

ぼんやりとした意識を汽車に揺られて四時間ばかり、大原の終點驛に着いて扉を開けて出やうとした時、白緋姿の夫がつと目の前に立つて私の手の袋を取つてくれました。麥莖帽子の下に見た顔の色の黒くなつて居りましたことしみる／＼物言ふ隙もなく直ぐに車を列ねて宿に向ふ途中、もの

珍しい漁村のさまをとみかうみしながら、濱の匂ひのだん／＼近づくにつれ、私の頬には言ひ様のない嬉しさと満足の血が燃えるのでした。

碎けて散つて白く飛ぶ濤に濡れるほど近く岩についた道をのぼつて、やがて車は岬の上の宿に著きました。庭を掃いて居りました一人の婢が、車の音に振りむいて私達の姿を認めますと、急に笑顔が家の中にむけて何か言つたらしく、外の光りに馴れて来た眼には薄暗く見える檐先に、白い顔が後から／＼と浮び出て、四五人の婢が廊下に並びました。

『お歸んなさいまし』

『いらつしやいまし』

口々に聲をかけて車から降りたら私達を見くらべて、婢共はみな軽く微笑んで居ます。揃へられた赤い緒の草履をつきかける途端にちらと夫の顔を見ると、冷かされまいと豫防したやうだと思はれる至極眞面目な顔をして居りました。やゝ後れ走せに廊下に手をつかへて

『いらつしやいまし』

『お歸んなさいまし』

と目を伏せた女、私は直ぐにそれがお蝶なのを悟りました。お蝶は眞面目な顔をして居りました。私はとう／＼夫の所謂 My room に入りました。

かう思つて微笑をむけながら

『只今』と軽く手を支へました。それは趣きあるやうに寫つて居る海樓の二階のはづれの一間を

roomと矢線をひいた夫からの繪端書を思ひ出したのでございました。私は汗になつた著物を浴衣に更へやうとして袋の紐を解きながらふと

『あの、さつき一番後の方に居た、あのあれがお蝶さんでせう?』と言ひますと

『うんあの梯子段の際に居たのがね、今日はいやに眞面目腐つた顔をしてた』

はた／＼と足音がしてそこにお蝶がお茶道具を持つてはいつて來ました。

『お暑うございましたでせう。旦那様がまあ先達てからお淋しがつていらして……お話合手がな
いものでございますからね。奥様がいらつしやるつて話を伺つたものですから私どもも大變お待
ち申して居りました』

お蝶は伏目勝にかう云つて、脱ぎ捨てた私の著物を衣桁にかけたり帯を疊んだりして居ります。

『主人が大變いろ／＼お世話になりましたさうですね、ちよい／＼そんなことが手紙に見えたもの
ですから私も安心して居ましたどうぞ何分よろしくお頼みますよ』

私は言はうと思つたこれだけのことすらお蝶に言ひませんでした。それは面弱な私の性質が、夫を
わがもの顔に妻ぶつた口を利くのがお蝶に對して何となく憚られた故でございました。そしてそれ
だけ私はまだ夫に遠慮と隔てがあるのをうすら淋しく思はない譯にはゆきませんでした。私は私が
いつも言葉を補ふ時によくするやうな笑顔をもつて、たゞ

『お世話になります』とあつさり挨拶をしました。

二週間目ほどで會つて見ると、私はまた夫の前に恥かしさが新しくありました。胸に流れた嬉し

臺灣愛國婦人 第三十八卷 お蝶

さを包んで私は何を話していいやら珍しく煙草などを煙らして居る其前につましく座つて、問はれるまゝに祖母のことなどを一言二言話して居ますと、お蝶は鏡臺を持つてはいつて來て部屋の隅に据ゑる

『奥様お風呂をお召しなさいまし』と關際に手をつかへました。私はその時もお蝶がなせものをいふ時に目を伏せるのか、それが自分に對した時ばかりではないかしらとさへ思はれて、なんとなく氣にかゝるのでございました。

風呂あがりの肌を潮風にふかせながらしとくと鹽氣をふいた欄にもたれて、浪は浪を追うて走つては岸に頼れ、戯れ合ふやうに、またすねても居るかのやうに、果てしなく、たゞ果てしもなく漂つて居る海の面を、飽かすゝ眺めて居るうちに日は昏れかけました。器物の觸れ合ふ音に氣がついて振りむくと、お蝶が膳を捧げてすつと私の背を抜けて部屋に入つて行きました。外した眼を再び波の面にやると、湛へた光りは際だつてその力を弱めて居ました。

『千代さん』

聞き馴れた懐しさの其聲は夫で、われにかへつたやうなはつきりした意識の中に振り向くと、調べものゝ頁を開いて夫は反り氣味に私の脇に立ちました。簾戸の影に洋燈はともつて、散らかつた新聞や雑誌などを片づけるお蝶の姿が、薄い影法師となつて私の脇に動いて居ります。

『さあ飯だく』と夫は勢ひよく部屋にはいつてどつかと座蒲團の上に座ると、お蝶は私のもそれと並べて直して、

『どうも遅くなつて相済みません、私一寸大原まで行つてまゐつたものですから……』

と給仕の盆をひき寄せてきちんと座りました。夫との間に交される會話は、客の有無とか天候の具合とか、普通の世間話に過ぎませんでした。お蝶は夫に對してもやはり目を伏せて語りました。

耳に馴れぬ海潮の音が闇を運んで、籠戸を渡して入る風は涼しく部屋に満ちました。疲れたらうからと夫はお蝶を呼んで早目に床をのべさせましたが、お蝶は甲斐なくしく夫の背に廻つて寐巻を著更へさせたりして居ます。『あ、あれは私のしなければならぬことであつた』かう思つて私は部屋の隅に寐巻の袖に手を通しながら、全くよく届くお蝶の世話ぶりを淋しい氣持で蚊帳越しに眺めて居ました。

眩しい秋の光りと婢達の目を逃れるやうに、そこ／＼に顔を洗つて部屋にかへると、お蝶は梅干に楊子をつけて朝茶をすゝめて、昨夜廊下の闇で一寸握らせた半襟の禮などを改めて云ふのでした。私は夫の前にそれがどんなに極りわるかつたでせう。朝餉の時お蝶はふと今日が初日だといふ花村座の話などを初めました。わざ／＼ビラを持つて来てくれたのを見ると、嘯いて居る男の前に髪を亂した女の顔折れて居るところや、闇の夜に身を捨てようとしてゐる女を若者が抱きかゝへて居るところなどの場當りが、挑發的に描かれてありました。で夫が晩に三人で行つてみようといひ出しますと、お蝶は遠慮らしくそれを承知しました。

晝過ぎ私は何とも知れぬ疲れに襲はれて、日課の調べ物をして居る夫の後に枕をひき寄せて横になつて居ました。ふとお蝶の聲が耳に這入つたと思つた時、ふはりとした搔卷の重さが足のあたり

臺灣愛國婦人 第三十八卷 お蝶

に感ぜられました。私はもう其時起きあがりたいうやうな気分でしたけれども、お蝶の好意を無にするのもと思つて其まゝ目をつぶつたまゝにして居ました。お蝶はそのまゝ閨際に座つて柱に背をもたせたらしく、夫に烟草の火をつけてやる氣あひなどして居ましたが、ぼつり／＼と宿の内儀の噂さや理料人の意地わるい話などをして居ます。その調子がどこなくかう打ち解けた、私の前に見えるやうな固つたところがないうやうに私には思へました。そこへおすみおつねなどといふ婢どもがやつて來まして、はしたなくませつかへしたり笑つたりして一方ならぬ賑かさになりました。婢共はみな夫を花井さん／＼と馴々しく呼んで居ました。それはまだ夫が書生であるのと、長い逗留客に對する親みからでもありませう。

『さあもういきませう、逐ひ拂はれないうちに』とおすみがばた／＼駆け出して行くと

『待つてゝ頂戴よ私も行くから』とお蝶の珍らしくはしやいだ聲がします。

『まあ御ゆつくり遊ばせよ、奥様』

おつねはかう言つておすみの後を追うて驅けて行きました。私は何がなしはつとして益々起きあがる場を失ひました。

『それではお伴いたしませう』とその日の夕方お蝶はさつぱりした浴衣に著替へて私達の部屋に來ました。二間と離れ／＼は白地の浴衣がほのかになる程暗い夜で、浪の音に遠ざかつて行く足音が、小刻みに一つは荒く、お蝶の草履はひた／＼と其後から續いて來ました。

『まあ暗い、提灯を持つてくればようござんしたねえ』とお蝶はたび／＼かう繰り返しました。まゝ

た。

「奥様の割にお早いこと、私はまたこれで精一ぱいなのでございますよ、花井さんあんまりお早いですもの」と息を切らして居りました。醜い——といつても悪感を催させるやうな顔ではなく、たゞ色が黒いのと少し頬骨が高いのがお蝶の爲に損なところでした。別段粧ふとしないところにまた垢抜けのした氣持よさがありました。尤も生れは本郷の切通し下といふことでしたから——割にはお蝶はあまり健康らしくは見えませんでした。

花村座といふのは、大原の町近くに此頃建てられた舞臺で、夜目には原とも畑とも見分のつかぬ吹き通しに、アセチリン瓦斯をともして道行く人々を呼んで居ました。その灯のぐるりを澤山のかね蟲が飛び廻つて居ました。三枚の札を買つて中にはいると、雑な鮑目のざら／＼とした樹に、避暑客がちら／＼何處やら整はぬ場内を綴つて見えました。木の音も厭に耳に響いて幕があくと、伯爵の病室にスリッパも履かない人達がうろ／＼と出たりはいつたりして其言葉といひ其容子といひ、微笑まずには居られないやうな演じぶりでございました。

「まあ酷いことをするんでございますねえ！」とお蝶は熱心に見入つて居ますので餘外見をして居た目をつひ誘はれて舞臺にやると、目のきつい丸鬚に結つた女が、伯爵に毒を飲ませて、其苦しみもがくのを膝の下にして口の中にハンケチを押入れて居るところでした。

歸りは殊に道の暗さを感じました。お蝶はさきから齒が痛むと言つて牙えない顔をして居りましたが、疲れたせいもありませうけれど、三人は黙つて一語も語らずに雨戸の閉つた宿に著きまし

臺灣愛國婦人 第三十八卷 お蝶

た。浪の音の調子によつて、引く波寄せる波の、それと見分けられる程海の面の暗く／＼荒れて居る夜でございました。

明けて見れば火を運んで来る婢はおつねなのでありました。お蝶は午過ぎに一寸顔を出して今日から受様が違つたことを告げ、

『折角奥様もいらしたからと思つてましたのにほんとにお名残り惜いけれど……今度こちらの方はおつねさんの番になりましたとおつねさんは面白い人だからようござんせう、私は今度松ですの、それでもまたちよい／＼お伺ひしますから、御用があつたら何時でも仰言つて下さいまし、どうせこの二三日は隙なんだからまた寄せて頂きます。あのそれは出しますんですか？』とお蝶は机の上に置いた私の手紙を取りました。その筆くせの『ちよ』と小さく書いた字は、那須の山奥から毎日この海岸へ、幾度お蝶の目を受けて夫の手には渡つたでせう、そんなことまで思はれながらお蝶の去るのが私にはなんとなく頼りなくも亦、心持の自由になれるのが嬉しいやうにも思はれるのでございました。

おつねは氣のさくい話の面白い女でした。どちらかといへば私の心はその蟠りなさを喜びました。おつねの前では夫への仕向けも心のまゝにすることが出来ました。朝晝晩の給仕に侍べられても、なんとなく氣のつかへるやうなことはおつねになつてからありませんでした。おつねは氣輕にお夕飯がすんだらあの岩の上に御案内しませうなどと、私達を連れて宿の前の岩道を先に立つて下りて行きました。濱菊の裾を引く岬の道を分けて、蔓草にたよりながら危いところも辛じて降りて

行きました。先へくへ行くと行くおつねの姿を見失はないやうに、私は胸を躍らせながら夫の後に續きました。飛沫の足許に近い岩の上に立つて振りかへると、宿の半面は高く遠く薄暗にたつて見えま
す。その二階の欄干に近く立つて、朧な顔がこちらを向いて居る姿を見つけた時『お蝶さんでせう
あそこに立つてるのは』と私はたちどまりました。

『さうぢやないだらうーいや、さうだく』

『さうでございますよ、お蝶さんですよ』とおつねもたちどまりました。私と夫は同時に手を振りあげて合手をしました。すると豆粒ほどの姿もそれを受けて動いてみえました。お蝶は私達の姿が岩の出鼻に現はれた頃から絶えず目を放さず見て居たものと見えます。さう思ふと私は、岩から岩にうつる時なぞに夫に手をひかれたことなぞが、恥かしくも亦得意に思ひ出されるのでござい
ました。それにしてもお蝶は今どんな氣持がしてゐるだらうと思つて、隠れ岩を越す浪の一かへりく毎にこめて行く夕闇のやうな寂しさが、私の胸にも覺えられるのでございました。

風の日が続いて共同海水浴場には砂に伏す人が日にく多くなりました。青く澄んだ海の面に浮く頭の數を、櫓の上に見張る救護員の赤い帽子に日がちりく照つて、茶屋の裏手の葦簾には貸浴著が絶えず乾かされて居ります。或日も夫につれられて少しばかりの潮を浴び、宿にかへつて夫が風呂を浴びる手助けをしながら、軽い氣持になつてローレライを小聲に口ずさんで居ますと、岩を削りぬいて作られた風呂場の外を、草履でゆく人の姿がちらと見えましたので、窓からのびあがつて堀越しに見ると、半幅の帯を男結びにして脇帯に手をさし入れたお蝶が、もの思はし氣な風

臺灣愛國婦人 第三十八章 お 蝶

をして過ぎて行くのでした。私はこの二日ばかりお蝶の姿を見なかつたのを思ひ出し、それに軽い氣持が手傳つて、

「お蝶さんー」とちよいと振りむかせる位の積りでかう呼んでみました。お蝶は一寸足取りをとめて振りかへりましたが、私を認める

「あら奥さんでしたか」とそのまゝ引つかへして道に向いた風呂場の口からはいつて來ました。其姿がなんとなくしほくとして居りました。

「浴場に行つてらつしやいましたの」と湯槽の中を覗いて夫と顔を見合せ

「まあ随分此頃は黒くおなんなすつたのねえ」

「暫く見えなかつたねえ君、どうかしたの？」

「どつか悪いの？」と私も同時にかう問ひかけました。

「えゝ……」

お蝶は曖昧に返事を鈍らして胸のあたりを押すやうにして居ますから、

「ほんとにどつか悪いんでせう？」と重ねていひますと

「えゝ、すこし胃がわるいもんですから昨日から寝んで居ました。痛むんですのこゝが」と乳の下をさして見せました。

「そりや不可いね、醫者に見せたらいゝぢやないか、顔色も悪いやうだよ」

「えゝ大したことはないんですわ、やつぱり胃がわるいんだつて言はれました。今日はもうよほど

いゝんですもの、今一寸大原まで行つて來やうかと思つて出かけたところなんですの——御無沙汰してゝすみません』

お蝶はめつたに笑顔をしない女だと思ひます。長い睫毛をいつも伏せて『えゝ……』と煮え切らぬ返事を前におくのが其癖でございました。さうは思ひながらも其都度、私は聞くべきことでないことを聞き出さうとしたやうな、我ながら妙ないやな感じがしたり、我身の年が行かぬのを思つて口を噤んでしまつたりいたすのでした。

『私もう東京に歸つてしまはうかと思つて……』とお蝶は暫くしてこんなことを言ひ出しました。

『どうして？』と顔を見た二人の視線を外すやうにして

『九月になつたらどうせ歸る積りでしたけれどもうなんだか厭になりましたから……それに此節のやうに隙ぢや私一人つ位居ないたつてさう困りもしやしないでせうから』

『どうかしたの？ なんかあるんぢやないか？』

『そんなことはないで私達もどうせ九月になつたら歸るんだから一緒に歸りませうよ、ねえお蝶さん』と私は馴々しくかう言つてみました。

『えゝ……』とお蝶は相變らず生返事をして凝乎と何事か考へて居るやうでした。私はふとお蝶のかういふ態度が憎いと思ひ出しました。

一つ捕へて來たのゝ胴を縛つて、絲の限りに横に這ふのを引き戻し、つゝいたり怒らせたり一晚弄んだ岩盤を、そのまゝに忘れて寢て覺めた朝、絲は廊下に竝んだ草履の緒に搦められたま

臺灣愛國婦人 第三十八卷 お蝶

ま、蟹の姿は何處にもないのをもの侘しく思ひやつて居るところへ、おつねが慌しく一通の電報を持つてはいつて來ました。それは那須の家から私へあてたもので、祖母の病氣が急に草つた知らせなのでございました。私は思ひの外其時心が確かであつたのを不思議に思ひます。私は私がこの濱邊を去つたあとのお蝶を思ひやることも出來たのでした。夫はやはりひとり残ることになつて、私は直ぐに旅立つ用意を初めました。

おつねに聞いたといつてお蝶は間もなく私の部屋に見えました。今日は一束の銀杏返しに結うて、初めて氣のついたお蝶の左の指には五分ばかりの指輪が箝めてあるのです。

『まあ御心配でございませうねえ、折角まあお馴染になりましたのに』とお蝶は度々こんなことを繰りかへしながら、私の後に廻つて背中中の皺を作つてくれたり帯を結んでくれたりしました。きちんとして大變氣持がようございしました。これならば兩國に著くまでゆるみつこはないなぞと思ひながら、私は残り惜しく夫に別れを告げました。

慌たゞしく來て慌たゞしく歸る私を、婢共はまた廊下に揃つて見送つてくれました。おつねとお蝶は下駄を履いて私の車近くに寄つて、又近々にお出でになられるやうになるのを祈つて居りますといひました。

『それではあとをよろしくお頼みますよ』

私はお蝶の方に目を向けてかう言つて、ぱつと洋傘をひらきました。途端に車は餘ろに宿と人々を後にしました。――。(完)